



拜啓 板垣市長さま

橋場文俊

冬季オリンピックを再度誘致しようといふことが、ほぼ本決まりになったようですね。

それは決して悪いことではないと思うのですが、やはり私たちは反対せざるをえないのです。

第一に、板垣さんが世論調査をしたといっていますが、その方法には極めて疑問が多いことです。私たちが新聞による発表を読む限りでは、役人たちのデッチあげのよう感じられました。一体、なん人の人を調査したのでしょうか。その年令分布も、職

業分布も、性別も一切わかりません。札幌の全人口の何%の人を調査したのかも不明です。

特に最近では、道・自治体の委員会なるものなかに、担当課ですつかり立案し、方法をきめてから委員会に提出し、形式的委員会を開催し、責任を委員会に転嫁して行政をおしすすめることが多いように思えます。ですから、板垣さんの言葉を全部信用するわけにはいきません。

第二に、冬季オリンピック再会による利益者は、一体どれほどいるのでしょうか。私たちは被害者になります。一般の物価は、全国平均を大きく上まわって上昇するでしょう。ホテルは満員、雪の道路交通は変更され、規制されて困ります。一般の人たちは、おそらく私と同じように思っているでしょう。現に前回のときでさえ、そのような不平の声が随分と聞かれました。一部の利益者のために、大勢の人に犠牲を強いるのは、良識があるとは思われません。

第三に、前回おこなった恵庭岳のスキークースの復元工事は、いまだにできていません。使用前の約束では、ただちに着手することになっていました。このように、日本の政治を信用するわけにはいかないのです。

第四に、いまの日本で、自然がある程度の姿をとどめているのは北海道だけです。これ以上の自然破壊をしてまで開発することは、いまの日本では必要のないことなのです。

第五に、この行事によって、札幌市が政府からの援助や交付金をのぞむのであれば、それは政治手腕の問題であつて、そのために自然破壊をくりかえすことと引きかえにして、やつてはしくありません。

以上のことについて再考されることを私たちは強く望んでおります。
(「えぞまつ豆本」版元)

野幌森林公園とキタキツネ

村野紀雄

野幌森林公園は私の住んでいる近くの朝に夕に仲間や子供たちと入ることが多い。この公園でキタキツネを初めて見かけたのは、四年ほど前の春の朝でした。路傍にフクジュソウが咲き、雪解水にエゾサ

ンショウオやエゾアカガエルの卵塊がひろがっていて、子供たちも私もこの卵塊に夢中になっていました。キツネは、こんな私

たちを、路上から眺めていたわけです。私たちがそれに気づくと、身を翻して路傍の花々の上を駆け抜け、まだら雪の残る林の内に跳び込みました。そして林の奥からこちらを伺い見るのですが、瘦せた成獣でした。このキツネには、その後もよく出会い、いつも路上をどこと逃げ走つては、一定の距離をおいて振り返つてこちらの様子を伺う様子が、とても面白がありました。

そのうち、私を見る以外にも、公園のあちこちからキツネを見たとの情報が入るようになりました。一人で探鳥のため、森に入った女性のYさんは、路傍のベンチでお握りを食べていて、ふと顔をあげると、すぐ前の草むらからキツネが自分を見つめているのに気づきました。不気味になって、食べかけのお握りをザックにしまいこみ、あたふたとその場から逃げだすと、キツネはとことと後についてくる。そのうち、その姿も消えてYさんはほっと一安心、前を向いたところが、進もうとする路の傍らの草むらから顔を出しているではありませんか。たまたまYさんは駆けだしたということでした。

公園内のキタキツネは、このころから確かに増えました。そして一昨年ごろからは瑞穂池の畔や大沢、それに登満別などで餌付けを試みる人がいて、人の差し出す餌

慣れた子ギツネがすり寄ってくるようなものもなっていました。生まれて間もない子ギツネは警戒心が薄く、好奇心にあふれているので、まことに可愛らしい。カメラマンが餌を使って、彼らにポーズをつけている場面に出会うこともありました。

昨年には、二カ所の営業拠点がわかり、他の個体の動勢などから見ると、野幌森林公園はおよそ三家族ぐらいに棲み分けられているようでした。そして、大きくなった子ギツネたちは、やがて大胆にも、年間六〇万人もの行楽者が娯集する北海道百年記念塔の下や、国道二二号線近くに姿を現わすようになりました。どこからか盗ってきたのだらう、鶏の羽がそれらの近くに散乱している朝もありました。その冬、彼らの足跡は森の中の雪の上、いたるところに見られたものです。それにひきかえ、ユキウサギたちの足跡は前年に比べると随分少なくなりましたが、これは、きつと増えたキツネに食べられてしまったのでしょう。そしてそれでもなおも、キツネたちの餌はこの冬不足したようで、キツネ自身も淘汰されて翌春に見かけられる姿が少なくなりました。森からさまよい出た彼らのうちの二頭が、国道上で車に轢き殺されるという事故もありました。

このユキウサギの減少やキタキツネの消

長が、森の自然の摂理に沿うのであるなら、それはそれでいいのですが、じつのところ自然そのものにしたがっていないような状況が感じられて気になります。

原始林といわれる野幌森林公園の森には人為がまことに多くなっているわけです。夏の間、キツネを餌で呼び寄せようとする人、写真のポーズをとらせるために、豚や鶏の骨を遊歩道に置きちらす人、山菜やきのこを採るため森のいたるところに立ち入る大勢の人、運動の場とばかりに森に解き放たれる飼犬たち、造林木を食害するノネズミを退治するためにまかれる毒だんごや天敵として放たれるイタチの群など、皆それぞれに気持の理解できる行為ですが、それらが、この森の自然のサイクルにどんなに影響を与えていることでしょうか。たとえば、ゆきあたりばったりに餌づけされ、餌を貰うことに慣れた子ギツネたちは、厳しい冬に自分で餌を捜す能力に欠けることとなるでしょう。彼らは、いま森の周囲の団地のごみをあさって暮しています。

森林公園の周囲には人家が急増し、森の中は中で人工が増えて、森そのものが原始林というに値しないといわれてから久しいのですが、多くの人々は相変わらず、この森を野幌原始林と呼びつづけています。

(北海道生活環境部自然保護課)

反対者のひとりごと

石 島 忍

札幌に冬季オリンピックを、またもちこもうとしている。考え方の発想は良いとして、なぜ、二度もやる必要があるんだらうか？ 自然と人間の間だけには一定の距離が必要のように、オリンピックにだって時間の距離をもち、植林した樹木が使えるようになつてから考えたつてよいだらう。

オリンピックが開催されたあとの整理がまだついていないし、反省だつてなされていないではないか。新しくできた資料室にだって、まだまだいろいろなものが必要だし、競技場に使われた跡地だって無惨なものだ。なぜそうなのかを考えてみたい。

開催されたのは札幌だが、運営、管理にあつた人間がみな中央の利益目的人で、停年に近い人達によつて運営されたからだらう。終わってしまったえば、もう知るもんかの感が、非常に強く感じられる。

オリンピックが開催されているときに思ったことだが、札幌で開かれていながら市民が自由に見ることができなかった。ポス

ターや、そのほかいろいろな設備が内地製品、あげくのはてに五輪のマークが入つたみやげ品の九九多までが、内地製品となつていた。そして内地から来札した人々によつて、そのみやげ品は買われ、手に持ちきれないほどの荷物を買いこんで帰つていった。

オリンピックを計画した人、見に来た人、運営した人が、みな内地人だったのだらう。しかし、残されたものもある。

地下街・地下鉄―おのぼりさんの散歩道 駅前赤字デパート―ひまな主婦の散歩道 ススキノ―男性天国、セックスロード、まずはこんなところかな。

企画の点で、北国に住む人の気持(合意)が結びついていなかったのだ。また、オリンピックが開催されると前回以上に一度うま味をあげわっている内地人が乗りこんでくるだらう。

オリンピック反対者への配慮が、まったくぬけていたのだ。「反対者がいたの」と問われたときもあつた。

市民参加、市民との対話を忘れた市政がなんともたえられない。二度もやらなくてもよい。オリンピックを開催する気持で市民との対話、参加を求め、自分達の住む札幌の文化と自然を育てたらどうだらうか。このことが札幌市には急務なように思うの

だが、それでは、冬季オリンピックをどこでやるのだ。びんぼう人の考え方を聞いてほしい。

世界のありとあらゆるおもちゃを買いあさっている、サウジアラビアの王様に一度やらせたらどうだ。あそこの国には雪はないぞ。ないからおもしろいのだ。いま、世界の企業人が王様に、いかに金を出させるかを考えている。そこで、雪よりも水よりもすべる赤いジュエータン（石油からつくる人工雪・氷）を開発させて、砂漠の真中にジャンプ台をつくるのだ。世界を手に入れようとしている王様であればできそうだ。

世の中はかわる。変化にとんだところからは、世界的な好記録も生まれようというものではないか。不景気にホラを吹かせていただき、ありがとう。

(サツポロ造形社ボックル)

登山と林道

高沢光雄

今年の元日に日高山脈の神威岳に登ってきた。コースはニシユオマナイ川の夏路を避けて、ソエマツ沢から神威岳南西尾根を

たどった。最初の計画では七日間を予定していたのであるが、それが札幌からの往復時間も入れて、わずか四日間で成し得た。

ソエマツ沢といえば険悪な沢で、函がつつき滝があつたりし、そこを通過するだけでも数日を要するのであるが、そこには林道が高巻いて開削されており、それを利用してもらった。

国土地理院の二万五千分の一地形図の日高山脈の部分は空白部が多かったが、昨年十一月三十日発行分で、ほぼ全域が出揃い「神威岳」と「ピリカヌプリ」の地形図を携行して行った。それによると、林道はボソウラカワ川の出会いまでついているのであるが、実際にはその奥さらに二キロ延びており、このままではやがてピリカヌプリ直下まで達するのではなからうか。

林道への車の乗入れはニシユオマナイ川とソエマツ沢の二股地点までで、そこには柵が架せられ施設されているので、林道走行の危険を防止するには当然なことである。長い林道を重荷を背負いながらスキーで歩行するよりはと、今回は大きなプラスチック製の櫓を使用したので、林道間の輸送には大きな威力を発揮した。

林道終点、つまりわれわれがたどろうとしている南西尾根の末端に、渡るべく釣橋がかけており、足を濡らすことなく山

にとりつくことができた。最初はすごい笹藪ごぎで難儀し、積雪が多くなった中腹部からの登行は容易となり、一、一〇〇m地点に幕営し、翌日頂上に立つことができた。あまり簡単に登頂し得たので、喜びが湧くどころか、登山の醍醐味が半減してしまつた。

ソエマツ沢は険悪な流れであつたので、いままです森林伐採に手が出せず、自然林が保たれていたものであろうが、現今の土木工法ではどんな難所も開削し、林道がつくれ、美林が伐採され、植林が行われるのが林業行政なのであろう。途中で、ダム工事も併行して行われていた。

山で会った人たちは鹿狩りのハンターだけで、途中で獲物を解体し、足の骨が捨てられてあつたりして、どうも自然保護と動物保護と逆行する、いやな思いをしてきた正月山行であつた。

(丸善株式会社札幌支店)

自然林の喪失

遠藤太郎

一九五五年頃までの弟子屈町・摩周湖

黄山の自然は、素晴らしい景観に恵まれていました。けれども現在の姿は、観光路、林道周辺はそのほとんどが伐採跡といえましよう。それは植林目的であり、農地・採草牧草地であり、また、観光地としての特色をもつ施設地でもあります。

これら自然林の樹冠部が持ち去られた後は陰湿な環境下に耐え、また適応してきた数多くの低木や草本類は姿を消し、特に絶対的な陰性植物は強度の光と強風による乾燥化などの環境変化によって枯死・消滅の運命にさらされ、乾燥・陽光植物であるアカバナヤクソウ、ヤナギラン、オオハンゴンソウ、レイヨウショウマ、ヒヨドリバナといった林縁植物が侵入し、エゾトリカブト、クサレダマなどの植生が優占してきております。

特に、エゾショウマは伐採年数経過の大きい沼湯林道、川湯仁伏池の湯間の指標植物となりつつあります。また、タラシキなどの陽樹の侵入も見逃すことができません。

一九六九年の台風による大量の風倒木現象は、集中的な強風通過によるものとしておりますが、これは森林の疎開量や道路幅員の広がりとの関わり合いにも、大きな要因を含んでいるものと考えられます。それは、五七―五八の二カ年この地に住んだ私

は、もっと大きな強風に見舞われながら、このような惨状にいたらなかった経験からも推測されます。

故・館脇 操先生がこよなく愛されたこの地は、先生がかつて指摘されたとおり、硫黄山麓植生のハイマツ、シラカンバ、イソツツジが崩壊寸前に追いやられ、川湯―摩周河側の天然林も昔日の姿を消し去っています。

誰がための国立公園なのか、関係当局の自然保護に対する姿勢・対応に数々の疑問点と、憤懣やる方ない感慨が胸をしめつけます。
(在・釧路市)

信州安曇村から

百 武 充

昨年の秋に転勤となり、信州に来てしまいました。紙きれ一枚で全国どこにでも行かねばならぬのは木ツ端役人の定め、仕方ないことですが、すっかり自分のものとしていた(つもり)北海道を離れるのは、やはり辛いことでした。

本州での生活は十年ぶりなので、珍しい風景にたくさん出会います。柿の実がたわ

わに実っていること、アカマツやスギの林、けわしい山並み(それにしても北アルプスって、こんな崩壊地だらけの山だったでしょうか)、オナガの群れ。昔慣れ親しんでいたものがひどく目新しく映るのは、それだけ私が北海道に深入りしていたということなのでしょう。

こちらに来てまず気づいたのは、ロクな森林がないことです。とにかく車道から見える遠近の山々、みな貧弱な林相です。特に標高の低いところ、傾斜の緩いところがひどい。野幌のような、あるいは阿寒のような平地の天然林は、すっかり消えてしまったようですし、大きな木もありません。

北海道にいたときは、北海道の自然の豊かさはみせかけだけで、実情はもはや大自然などといえたものではない、こいつていました。それは、いまでも正しかったと思っています。それは、いささか頼りなくみえた北海道と比較してさえ、本州の、少なくとも北ア周辺の自然が貧しいというのはたいへん寂しいことで、北海道が本州の轍を踏まず、より賢明な進路を選択されるよう、心から願わずにいられません。

こちらに来て四カ月、北海道から聞えてくる話は、心休まらないものばかりです。大好きだった風蓮湖周辺の原野、そこに飛行場や産業道路をつくる話があるそうです

し、釧路湿原にしても、いつになったらいまの姿がまもられる保証が得られるのか、気にかかることです。

北海道自然保護協会をはじめ、道内の自然保護団体は、全国的にみて非常にレベルの高いものだと思いますが、どうか札幌周辺中心になることなく、道東・道北の目立たないけれどたいせつな自然保護の問題にも、目を配っていただくよう、お願いします。多くのあの原野はいつたどこにいったのでしょうかね、などという日は、決して来てはならないと思います。

(中部山岳国立公園管理事務所)

浦河で新年に思うこと

家 登 美智子

八月七日、三十何年ぶりの有珠山噴火の日に、学校の都合で札幌へのこる娘達と別れて、一足先に赴任しておりました主人のもとに参りました。この噴火は、私の明日への祝砲かそれとも警鐘かしら、期待と不安の入り混じった気持で浦河へ。

浦河という地名は、アイヌ語でウララベツ(霧深き川の意味)から転じたものだと

うで、苫小牧から汽車でおよそ三時間、皆様もよくご存知のように、サラブレッドの生産地、ふるさとです。背後にはラッコ岳、アポイ岳、ポロシリ岳などを含む日高山脈を擁し、前面に太平洋を望み気候が温暖で雪もあまり降りません。年中釣ができて、チカ、アブラコ、時にはタコも釣れるとか、主人も休日にはセッセと餌をとられに通っており、大きなクロ鱈はおさしみに、チカの天ぷらなど、札幌では味わえぬ美味しさです。

また春から初夏には、フクベラ(和名ニソウリン)、ヤチブキ、ヨコミなどの山菜にも恵まれ、夏は野イチゴの果実酒造りを楽しみ、秋は親しくなった農家へ漬物用の大根、キャベツなど分けてもらい、おやつにいただいた南瓜の塩ゆでの美味しかったこと、そして何よりも空気と夜空のキレイなこと、自然のありがたさ大切さ、都会では考えられない生活です。

今後、いくたび居を替えるかもしませんが、その土地でのふれ合いを大切に、退職後は主人とともに転勤地を訪ね歩くのも悪くはないなあーなんて、娘達と離れての不安と淋しさを慰めておきます。

さあ、暖かくなったら植物図鑑を手に、あの山へ出かけましょう。

(浦河在住・前事務局長)

